

学生アスリートのキャリア教育に関する研究
—日本のキャリア教育と学生アスリートの職業選択—
A study of career education for college athletes:
Career education in Japan and the choices of student athletes
1K03A202-7 氏名 松信 恵
指導教員 主査 リー・トンプソン 先生 副査 武藤泰明 先生

1. 研究目的

近年わが国では、人々を取り巻く雇用環境がめまぐるしい変化をみせている。団塊世代の大量定年問題、早期離職問題、無業者・フリーターの増加、雇用形態の多様化などの様々な雇用問題が起きている。この要因は、景気の低迷、日本特有の雇用慣行の変化、情報のグローバル化や産業構造の変化等と言われている。その中で、特に私が注目したのが、若者の「働く意識の低下」である。景気の低迷、雇用慣行の変化は日本国内で起こった問題であるが、グローバル化や産業構造の変化は、多くの先進諸国でも共通に起きている。しかし、これまで日本において、失業者・フリーターの増加が問題になることはなかった。にもかかわらず、近年その問題が急激に拡大したのは、人々の就業意識が希薄になったからなのではないだろうか。この就業観を育成する機会と考えられるのが「キャリア教育」である。とすると、日本の「キャリア教育」は不十分なのではないかという疑問が生じてくる。

そして、次にスポーツの世界に焦点を当ててみるとどうだろうか。大学で部活動に所属している選手は練習によって時間的制約を受けるため、就職活動に時間を割くことができない。また、高校時代にも部活動を行っていたと仮定すると、アルバイト・インターンシップなどの経験もない者がほとんどだろう。社会と接する時間の限られる大学アスリートは、一般の学生と比べ、職業意識が養われる機会が少ない環境にあると考えられる。

本研究では、日本における「キャリア教育」の現状と、特別な対策が必要と考えられるスポーツ界の「キャリア教育」についてその実態を明らかにしていく。そして、職業選択という人生の岐路を控える、学生アスリートのための効果的なキャリア教育の方法の考察を目的とする。

2. 調査方法

日本の「キャリア教育」の現状を把握するために、文献による調査を行った。日本におけるキャリア教育の取り組みを調べ、そして、日本よりも以前にキャリア教育の強化を始めた国として、イギリス・アメリカ・ドイツの実態を調査し、比較することで、日本のキャリア教育が世界的な

水準からみて、どのようなレベルにあるのかを明らかにする。

次に、学生アスリートの職業選択を取り巻く問題を明確にするため、体育会系・スポーツ学生を対象に就職支援事業を行う「インダス株式会社」に勤務する社員の方を対象に、インタビュー調査を行った。この調査によって、浮き彫りになった問題を認識した上で、学生アスリートの就業意識を高めるためにどのようなキャリア教育を行うべきか、その方法を考察した。

3. 結果

日本の「キャリア教育」の文言上・政策上の歴史は浅く、教育現場でもキャリア教育は研究段階にある。また、「学校教育が職業と結びつく」と考える日本人の意識は他国に比べて低い。日本の雇用状況の水準は海外諸国と並ぶまでに上昇しているにもかかわらず、「キャリア教育」は確立していない。以上のことから、日本は「キャリア教育後進国」ということができる。

またインタビュー調査により、職業選択の際に学生アスリートが抱える問題には、①就業観の未発達、②自己認識不足といったキャリア教育不足により生じる問題と、③大会との重なり、④競技以外のものを排除したがる気質、⑤指導者の理解不足といった、スポーツ界特有の問題とが混在していることがわかった。

4. 考察

「キャリア教育後進国」であると考えられる日本では、教育段階において十分な職業観・職業観の育成が行われなまま職業選択を迎えることになる。また、学生アスリートは特にその傾向が強くなりやすい環境にある。そこで、学生アスリート特有の問題を踏まえると、学生アスリート向けにキャリア教育は学内・学外の二段階で実施することが望ましいと考えられる。学生アスリートに有効であると思われるキャリア教育として、学内においては、必修の時間にキャリア教育を組み込む方法を、そして学外においては、企業をスポンサーとし、大学運動部に出向して「自己認識教育プログラム」を行う方法をそれぞれ提案する。